

郡山城 第12次

# 追手向櫓・多聞櫓

発掘調査概要報告書



1987.3

大和郡山市教育委員会

## 序 文

奈良盆地のほぼ中央に位置し、歴史的な文化都市として発展を続ける大和郡山市は、往時の城下町の姿を今日によく伝え、「文化財の宝庫」という評価をいただいております。

この大和郡山市の象徴とも言える郡山城跡では、市民団体の「明日のお城と城下町を考える会」が中心となつての城郭再建運動が順調に進み、昭和58年に追手門、同59年には追手東隅櫓の再建を成し遂げました。日本伝統の木造建築技法を用い、かつての姿にできる限り忠実に再現されたこれらの建物は、文化財の保存と継承に新しい道を開くものと確信しております。

このたび、さらに向手向櫓が再建される運びとなり、市教育委員会で事前の発掘調査を実施いたしました。向櫓部から礎石列が良好な状態で検出され、その調査成果は向櫓の復原設計に十分に生かされております。

本書は、今回の調査の概要を公表し、広く有識者の方々の御卓見を乞おうとするものです。内容その他まだまだ不備不足の点が目立つ本書ですが、多くの御意見・御教示をお寄せいただければ幸いです。

昭和62年3月

大和郡山市教育委員会

教育長 堀 口 喬 三

## 例 言

1. 本書は、郡山城追手向櫓および多聞櫓の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、下記の組織で実施した。  
〔調査主体〕大和郡山市教育委員会  
〔調査事務局〕同 社会教育課（課長 浅井康博）  
〔調査担当〕同 技師 服部伊久男・山川均  
〔現地作業〕東組  
〔調査補助〕今西泰子（四天王寺国際仏教大学O・B） 塚田一成（別府大学O・B）  
押田桂子（大阪基督教短期大学）  
〔整理補助〕今西泰子、押田桂子、荻田千恵美（奈良大学）
3. 調査に際しては、下記機関の方々より多くの有益な御教示・御協力を得ました。記して感謝いたします。（敬称略）  
（財）柳沢文庫保存会  
大和郡山市文化財審議会  
藤岡通夫（構造計画研究所）  
泉森紋、中井一夫、千賀久、河上邦彦（奈良県立橿原考古学研究所）  
今尾文昭（奈良県教育委員会）  
明日のお城と城下町を考える会
4. 本書の執筆・編集は山川が行なった。

## 本文目次

I. 調査の契機および経過	1
II. 郡山城における既往の調査	2
III. 調査の概要	4
1. 遺構	4
2. 遺物	7
IV. まとめ	9

### 図表目次

図1	トレンチ位置図	Ⅱ
図2	郡山城調査地点概略図	1
図3	調査風景	2
図4	礎石に転用された五輪塔(地輪)	4
図5	調査区平面図	折り込み
図6	柱状花崗岩および埋塞検出状況	5
図7	埋塞埋置状況断面図	6
図8	出土遺物拓影および実測図	7
図9	埋塞埋置状況	8
表1	郡山城調査一覧表	3

### 図版目次

図版1-1	空からみた郡山城跡
2	多聞櫓部分遺構検出状況
図版2-1	向櫓部分礎石列検出状況
2	〃

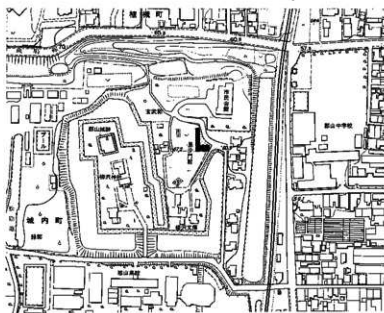


図1 トレンチ位置図

## I 調査の契機および経過

大和郡山市では市民団体「明日のお城と城下町を考える会」を中心として、郡山城の復原建築事業を推進しており、昭和58年に追手門、同59年には東隅櫓が再建され、その偉容を誇っている。

今回、それらに引き続き追手向櫓が再建されることとなり、それに先立ち昭和59年8月に、同建物の推定地で大和郡山市教育委員会により試験調査が行われた。その結果、向櫓のものと思われる地下遺構の存在が確認されたため、昭和61年6月に再建予定地区全域にわたり発掘調査を実施した。調査主体には大和郡山市教育委員会があたり、調査面積は約400㎡、調査期間は約1ヶ月を要した。



図2 郡山城調査地点概略図

## Ⅱ 郡山城下における既往の調査

郡山城下における既往の調査は、第1表に示すように、今回の調査を含めて12次に及ぶ。このうち、第6次までの調査は、第7次調査の追手東隅櫓・東多間櫓の発掘調査概報中でその概要を総括している。同書の刊行後、現在まで4回（今回のものを含めない）調査が行われているが、そのうち第8次調査は、今回の調査に先行する遺構有無確認のための試掘調査である。

他の3者については、いずれも概報等が未刊であるので、その刊行を待って後日、総括したい。

さて、これら既往の調査のうち、城郭の復原建築にかかわるものは今回のものを除くと、3、7であるが、いずれも顕著な地下遺構の存在が確認されており、郡山城の発掘では代表的なものといえる。第3次調査は、追手門再建工事に伴うものである。この調査により、追手門が南北2間（1間2.5m）の規模をもつ建物であったことが明確になった。また、雨落溝や埋塞など、建物に付随する遺構もいくつか検出されている。

第7次調査は、先述したように追手東隅櫓および多間櫓再建に伴うものである。この調査によって、隅櫓の規模が南北7m、東西6mであることが確認された。さらに、多間櫓の規模も、ほぼこの調査によって知られた。



図3 調査風景

次数	調査地	調査主体	面積	期間	概要	文献
1	大和郡山市城内町 (鞆曲輪)	奈良県立橿原 考古学研究所	m <sup>2</sup> 200	1979年 10月	建物、溝、水量調整施設	①
2	大和郡山市朝日町 (三ノ丸)	"	m <sup>2</sup> 1,000	1982年 12月	試験調査	②
3	大和郡山市城内町 (追手門)	"	m <sup>2</sup> 700	1983年 1～3月	追手門の礎石、番所の礎石、 雨落溝	③
4	大和郡山市朝日町 (三ノ丸)	"	m <sup>2</sup> 2,200	1983年 6～7月	第2次調査の本調査 櫓状建物、柵、土蔵	②
5	大和郡山市天理町	大和郡山市教 育委員会	m <sup>2</sup> 120	1983年 11月	中世の落ち込み 平城京右京九条三坊十二坪 に該当	
6	大和郡山市城内町 (毘沙門曲輪)	"	m <sup>2</sup> 13	1983年 12月	東西に走る溝状遺構	
7	大和郡山市城内町 (追手東隅櫓)	"	m <sup>2</sup> 300	1985年 1～3月	隅櫓の礎石列、多聞櫓の礎 石列	④
8	大和郡山市城内町 (追手向櫓)	"	m <sup>2</sup> 100	1985年 8月	試験調査	
9	大和郡山市朝日町 (三ノ丸)	奈良県立橿原 考古学研究所	m <sup>2</sup>	1985年 月	奈良時代建物 土坑	
10	大和郡山市北郡山町	大和郡山市教 育委員会	m <sup>2</sup> 120	1986年 5月	近代の土坑 平城京右京九条四坊五坪に 該当	
11	大和郡山市城内町 (玄武郭)	奈良県立橿原 考古学研究所	m <sup>2</sup> 400	1986年 6・7月	石組の溝、建物跡 埋塞	
12	大和郡山市城内町 (追手向櫓)	大和郡山市教 育委員会	m <sup>2</sup> 400	1986年 6・7月	向櫓の礎石列、埋塞	

表1 郡山城調査一覧表

### Ⅲ 調査の概要

#### 1. 遺 構

##### 〈上層遺構〉

今回の調査対象地区においては、本調査に先行して遺構の有無確認のための試掘調査が行われており、その際に、礎石の根石かと思われる、拳大の礎からなる集石遺構を確認している。これは現在の郡山城の、当該地区周辺における石垣の天端レベルにほぼ匹高することから、檜に伴う遺構として判断された。

本調査でも同種の遺構を数ヶ所確認したが、遺存状況は不良で、建物の存在を証明することはできなかった。当該地区は以前、耕作地として利用されていたといい、その際に上層の遺構（仮に存在したとすれば）はかなり大規模な擾乱を受けていると考えられる。

##### 〈下層遺構〉

現在の石垣の天端レベルより約1m下位に、かなり安定した遺構面が確認された。その上面には高さ1mにおよぶ人為堆積層がある。これに関しては、版築、互層積みのような特殊な技法は用いられていない。したがってその上面に遺構が存在したとすれば、この盛土は基礎としてはかなり脆弱な印象がある。

##### 向櫓部推定地

この下層遺構面において検出された遺構のうち、最も遺存状況が良好だったのは向櫓部の礎石列である。ここでは南北に7、東西に4と、計11の礎石を検出した（図版2）。礎石はいずれも不整形であるが、長辺の規模は50～80cmに及ぶ（図5）。これは、以前大手東隅櫓部で検出された礎石の規模とほぼ同じである。石材は、春日山周辺に産出する通称「カナンボ」石（東大寺の石段や石敷に用いられている）<sup>④</sup>を用いていた。

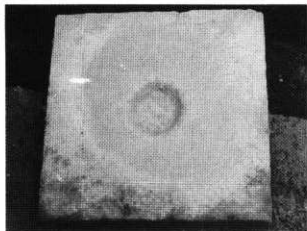


図4 礎石に転用された五輪塔（地輪）



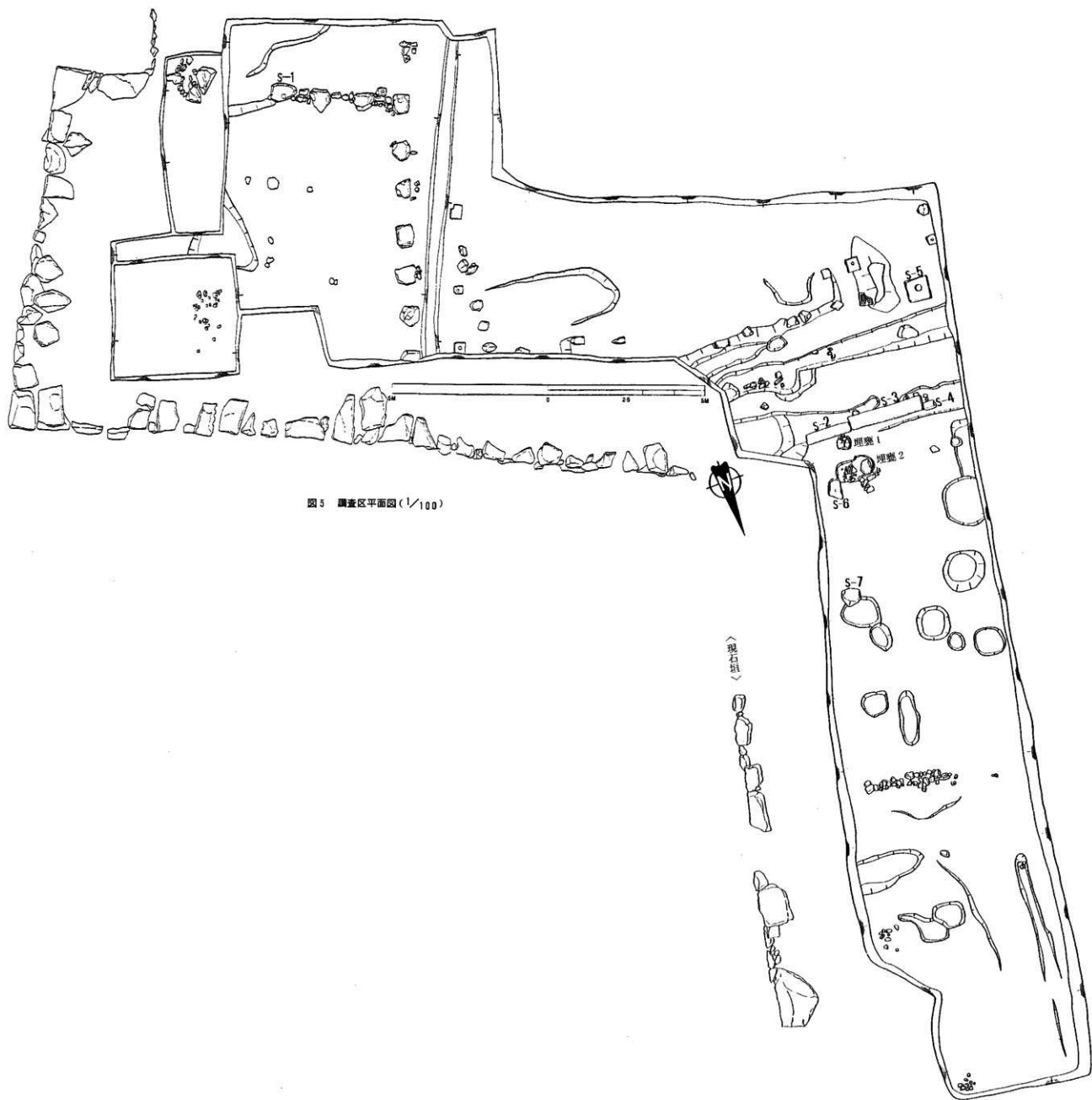


图3 調査区平面図(1/100)

建物の規模は、確認された遺構のみで判断すれば、南北6間以上、東西4間以上である。ちなみに、御沢時代の城郭復元案では、向櫓は下重4間2尺×5間とされている。また、今回確認された遺構では、柱間は1.3～1.5mを計る。東西礎石列では、礎石間に10～20cm程の隙を充填していた(図版2-1)。しかしそれは、S-1以東へは続かない。

#### 多間櫓推定地

向櫓に続く、多間櫓部分は遺存状況が悪く、礎石のうちで原位置を保っていたと思われるのは2つにすぎない(図5、S-6、S-7)。この2つに対応する東側の礎石を仮に現石垣の位置に求めると、その平面距離(梁行)は約5mとなる。これは以前調査された東側櫓礎石の東西幅約6mをやや下回る規模である。礎石は向櫓のものと同じくカナンボ石を用いており、またレベル的にもほぼ対応することから、両者は同時期の遺構と考えられる。

礎石ではないが、東西多間櫓部分推定地の北端において、柱状の花崗岩が東西方向に据えられていた。全部で3つの石からなるこの特異な構造物は、中心となるS-3の規模が長さ約2.4mで、S-2は長さ約1.4m、さらにS-4は長さ約0.3mであり、3者を合計すると4.1mの長さとなる。ただし、据えた時の掘り方が西方向に伸びており、石材をいくつか抜き取られている可能性も強い。いずれも他の構造物の転用材と思われるが、その性格は不明である。今後の調査における同種遺構の類例の検出をまちたい。

また、これらの石のすぐ北より埋塞が2基検出された(図6、7、9)。図7はその検出状況の断面図であるが、それにより理解されるように、埋塞1と2は、基底レベルを違えており、1は胴部以上が削平されている。このレベル差が両者の時期差に起因するのか、どうかは壘の埋置に伴う掘り方が確認されなかったため不明である。ただし、調査時の印象では、レベルの違いは時期差というよりは、埋塞の使用目的に応じたものと思われた。このことについては、今回の第12次調査とは併行に奈良県立橿原考古学研究所によって行われた、第11次調査での類例が参考となる。

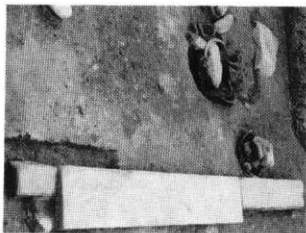


図6 柱状花崗岩および埋塞検出状況(南より)

同調査においても埋塞が6基検出されており、そのうちの2基がレベル的に上位に存在していたが、これも時期差という考え方以前に、埋塞の使用目的(方法)によるものとの考え方も可能であろう。

また、埋塞1、2共に検出時には内部に20~40cm大の礫が入っていた。この遺構に伴う建物廃絶時に意識的に投入されたものと思われる。

他に主な遺構としては、前記した石柱の南方より検出した五輪塔地輪(図4、図5のS-5)がある。これはもちろん転用材であるが、遺構面から約80cmも掘りこんだところに据えられており、その用途に興味もたれる。また、向櫓推定地のすぐ西側に散在する石のなかにも五輪塔の一部(地輪・空輪)や石仏が含まれていた。建物の間柱の礎石として用いられたのであろうか。ただし、確実に原位置を保つものはない。

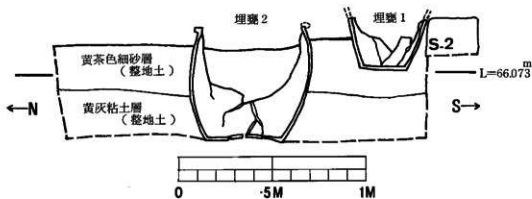


図7 埋塞埋置状況断面図(1/20)

## 2. 遺物

遺物の大半は、瓦である。瓦は、現在の地表面から遺構面に至るまでの盛土中に多数包含されていた。盛土中には根固めのために礫が多数混入されていたが、瓦の同種の効果を期待され、投入されたものであろう。明確な遺構に伴う瓦の出土はなかった。他の遺物には、甕（埋甕として利用）、土器細片、鉄釘等がある。

〈瓦（図8-1～5）〉 1～3は軒丸瓦である。いずれも三ツ巴文瓦であり、巴の周囲には12～24の珠文を配する。1、2は左回りの巴文である。巴文にはこの他、いくつか種類があるが、以前追手東階櫓の調査で出土したような、沢瀉文、立葵文、九曜文等をもつものは全くみられず、全て巴文瓦である点が今回の調査における出土瓦の特徴である。

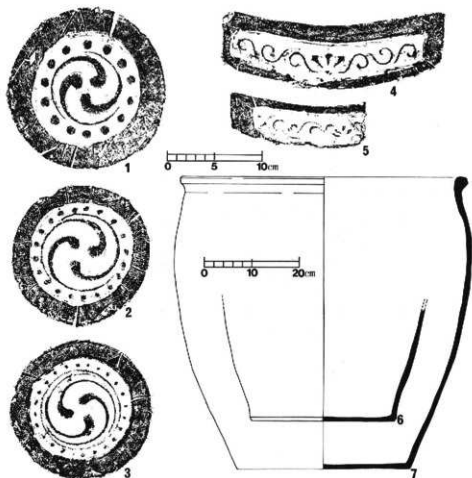


図8 出土遺物拓影（ $1/4$ ）および実測図（ $1/8$ ）

4・5は軒平瓦である。いずれもごく簡略な唐草文をモチーフとしている。

〈土器(図8-6、7)〉 埋甕として用いられていた甕を2点図示する。6(埋甕1)は胴部下半以下のみのものである。丁寧なタタキ整形の後、内外面共にヨコナデ調整が施されており、部分的に横位のヘラケズリを併用する。底部外面には布の圧痕がみられる。表面は瓦質土器のように煤を吸着させて暗灰色となっているが、それは内面には及んでいない。断面および内面は、明茶色を呈し、焼成には酸化炎が用いられたことがわかる。きわめて堅緻に焼きあげられた土器である。

7は、ほぼ完形を保つ器高62cmの甕である。内・外面共にタタキ整形の後、丁寧なナデ調整が施されている。色調は、表面が黒灰色、断面が乳灰白色を呈し、いわゆる瓦質土器の特徴をもつ。口唇部に幅約2cmに及ぶ面取りがみられ、木蓋等の存在が推定される。

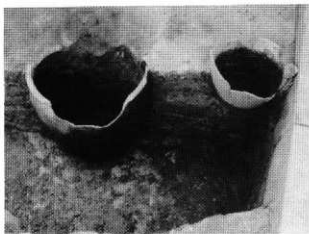


図9 埋甕埋置状況(北より)

## Ⅳ ま と め

以下に、今回の調査において得られた知見の概要を記す。また、今後の課題等についても併記しておく。

- ① 上層遺構に関しては、建物の存在した可能性は強いものの、その積極的な証拠は得られなかった。
- ② 現在の石垣の天端レベルから約1m下位に安定した遺構面が存在する。礎石等はこの遺構面より検出された。
- ③ 向櫓推定地においては、同建物のもと思われる礎石計11を検出した。それにより、向櫓は南北に10m、東西に4m以上の規模をもつ建物であることが確認された。
- ④ 多聞櫓推定地においては、東面多聞櫓部において礎石計2を検出しており、これによりその東西幅は約5mと推定される。また、それに関連する遺構として、特異な石組遺構や、埋壘を検出した。
- ⑤ 各建物の接続部分、あるいは入口部分を特定する遺構は検出されていない。
- ⑥ 小規模な礎石(間柱用か?)には五輪塔の空輪や地輪を転用したものがみられる。

ここにあげた①～⑥のうち、まず問題とされるのは、向櫓や多聞櫓のもと思われる礎石が、現在の石垣の天端より約1m下位に存在することであろう。櫓建築では通常、石垣の天端石を礎石として用いるが、そうなれば対応する礎石が1mも下にあったのではきわめて不都合である。石垣自体が当初1m程度低かったならばこの点は解決されるが、現在の石垣には継ぎ足した痕跡は観察されない。また、石垣全体を修築したという記録も管見にはなく、この問題については、その解答を後日に譲りたい。

つぎに、これらの遺構が示す建物の時期であるが、その推定の根拠となるべき遺物が、瓦類を除くとごく少量であり、また軒丸瓦に関しても追手東隅櫓の調査で出土したような沢瀉文や立葵文をもつものがみられず、全て三ツ巴文をもつ、広い時期を通してごく普遍的なものに限られるため、現時点では残念ながら明確にできない。なお、埋壘に用いられていた壘は、現在類例を調査中である。

追手東隅櫓の調査概報中で、報告者は「近世郡山城の発掘調査は、まだ緒についたばかり④」と記しているが、それから2年を経過した現在においても、状況にさほどの変化はない。しかし、徐々にではあるが、発掘調査の進行は郡山城のかつての姿を浮かび上がらせてはきている。最近、城郭研究のうえで、発掘調査の成果が重要な位置を占めつつあるが、それは郡山城でも例外ではない。今後は、学術的発掘を含めた、広域にわたる計画的な調査が必要であろう。

## 注

- ① 泉武「郡山城線曲輪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』橿原考古学研究所（1980）
- ② 東潮「郡山城三ノ丸跡発掘調査概要報告」『奈良県遺跡調査概報1982年度』橿原考古学研究所（1984）
- ③ 佐藤良二「郡山城追手門発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』橿原考古学研究所（1984）
- ④ 服部伊久男「郡山城第7次 追手東隅櫓・東多聞櫓発掘調査概要報告」大和郡山市教育委員会（1984）
- ⑤ 『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定'81』大和郡山市教育委員会（1981）
- ⑥ 調査を担当された河上邦彦氏（橿原考古学研究所）の御教示による。



1. 空からみた郡山城址（北より）



2. 多間櫓部分遺構検出状況（南より）





1. 向槽部分礎石列検出状況（南より）



2. 向槽部分礎石列検出状況（北より）

大和郡山市文化財調査概要 6

— 追手向櫓・多聞櫓

発掘調査概要報告書 —

昭和62年3月31日

編 集 大和郡山市教育委員会  
発 行 大和郡山市北郡山町 248-4

印 刷 市山泰文堂  
大和郡山市東岡町 48-7